

土 淨



昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別送達郵便物)第三二五号
昭和四十八年九月二十五日 昭和四十八年十月一日発行

第三十九卷

第十号

1973
10

十 月 号



—目 次—

表紙『ぶどう』松涛達文画

お十夜の季節を迎えて……………小 沢 勇 貫…… (2)

座談会「現代人の信仰心」…………… (6)

一条智光・佐藤治子

特集 開宗八百年と私く上…………… (11)

桑山春山・前田志津・松涛弘道

選集講話⑨ 三心篇……………佐 藤 行 信…… (18)

念仏・人と歴史⑨ 念仏弘通の兄弟……………平 祐 史…… (22)

異僧真覚〈第二十回〉……………柴 田 六五郎…… (26)

「道」高野への道……………高 橋 良 和…… (30)

浄土宗の国宝「知恩院の古写経」……………宇 高 良 哲…… (32)

庭前の栢樹子

僧問^ニ趙州^一云何^カ是^レ祖師西來^ノ意。

州曰、庭前^ノ栢樹子。(趙州錄)



或る僧が趙州^{ジウシュ}禪師に尋ねた。一体達磨大師がはるばる印度から中国にやって来た本意は何かと。すると禪師は答えた。庭先の栢^{やち}の樹だと。

白隠禪師は栢樹子の話は賊機がある（人をそこねかねない）といっているが、私にはむしろ白隠の「隻手^{せきしゅ}の音声^{おんしやう}」よりもっと素直に想われる。それは「野の花を見よ」とのキリストの教誡にも連る。そして直截^{ちてき}に不滅の生、天地無窮の大生命への直参^{ちきん}をさとしているといえましよう。大徳寺の清巖宗渭はこれについて「一時の見に執して千古の音を忘るる莫^なれ」と書かれている。

自らの悦樂のためには他の全てを害して憚らない風潮、營利の前には自然を環境をあえて破壊して止まない世相に対し、山川草木悉皆成仏を説いた仏教の真意に今こそ私たちは目覚めねばならないでしょう。私たちは謙虚な一求道者として、一本の草木の姿に宇宙永遠の声を見、聞きするよう努めねばなるまい。その時こそ、限りなき生命のみ仏、阿弥陀ほとけに心から南無する姿が現成^{げんじやう}することでしょう。

(K・N)



お十夜の季節を迎えて

小 沢 勇 貫

(大正大学名誉教授)

仏教の年中行事はそれぞれの季節感もともなっていて、民間ではひとしお親しみが持たれた。みのりの秋月影もさえて、浄土宗の寺々ではお十夜の法要が全国各地でつとめられる。

もろもろの愚者も月さす十夜哉

これは一茶の句であるが、むかしは十月満月の夜まで十日十夜の別時としてつとめられ、凡愚のものまですべて救われる浄土門のおしえが、ひろく民間の信仰心に溶けこみ、月の光りが一層お十夜の情趣を添えたことがよくうかがわれる。

ここ八王子の町には、大善寺のお十夜が古くから鎌倉に次いで関東の名物とされ、諷誦文の十夜でさかんであったし、

私の寺極楽寺もすぐ近くで、こちらは双盤十夜で法要はきわめて壮嚴に行われた。向う山の十夜行事が一カ月早められ、私の寺と同じ十月の十三・十四・十五の日取りに変更されて、他の事情もあって五十余年も前のこと、こちらのお十夜は休会になり、いまは大善寺のお十夜も昔のごとくではなく、私には小僧時代のいろいろ懐しいおもい出があるが、また限らないさびしさが感じられる。

お十夜の由来や、この行事が宗教的に大切な意義をもつことについては、やはり記して広く知っていただかねばならない。十夜とは正しくは十日十夜と申すべきを略して言ったのであり、『無量寿経』に「此において善を修すること十日十

夜なれば、他方諸仏の国土において善をなすこと千歳ならんに勝る」云々とある経文にもとずいて、十日十夜の別時念仏を行うようになったのである。なお『鼓音声王経』には上の経文を布衍して十日十夜不断念仏のことを教えている。『無量寿経』にはその理由をも説いて、み仏の世界では福德自然で、住民の間で毛すじほどの悪事も行われていない。我われの住むこの世界ではとく悪事が多く行われま善根を修することゝがむずかしい。この穢悪の世界で善根を修すること、特に念仏の大善根にはげむこと、一日一夜であっても、浄土において百年もつとめる功德にまさるもの、十日十夜なれば浄土で千年も修善するより勝れるとお示しになっている。

十夜法要の起源は『真如堂縁起』に伝えるところである。

京都東山の麓にある天台宗真如堂がその根本道場である。室町時代の永享年中平貞国という弥陀信仰に篤かった武士が、真如堂に詣でて三日三夜の念仏を行じ夢に靈験を感じ、続いて更に七日七夜の念仏を修したことから、十日十夜の経説にも符合するので、十日十夜と名づけて寺例となったといひ、その後真如堂では旧暦十月六日から十五日まで叡山に伝えられる引声念仏の儀式によって念仏を修行するようになった。それから六十年ほど後、明応四年（一四九六）十月、鎌倉の浄土宗光明寺の観誓祐崇上人が、後土御門天皇のお召によつ

て宮中で阿弥陀経を進講し、次いで真如堂十夜法要の式を行い、天皇の御感ななめならず勅許により光明寺にこの法要を移し行つたのが、浄土宗十夜法要のはじまりである。爾来永く浄土宗の専行のようになり、全国の各寺で年々さかんに修行されるようになったのである。

お十夜には双盤念仏が各地で行われ、また諷誦文の供養により先亡の霊をとむらうことも広く行われ、なお鴻巣の勝願寺は塔婆十夜で有名である。双盤念仏も念仏の唱え方などそれぞれ伝承もあり、地方農村などでは郷土色ゆたかに人びとの楽しみあう民間行事にもなっている。このようにお十夜が民間信仰にまで弘まった蔭には、宗門先徳の布教の努力があったことはいふまでもない。

十夜とてかしこき法の教かな

楊良の俳句も、江戸時代に十夜に法談説教の行われたことを挙げているのである。

民間行事となつてさまざまな地方の習俗もお十夜には取り入れられたところもあるが、しかし念仏の別時會が十夜の本義であることを忘れてはならない。阿弥陀さまが平等救済の本願を成就され、成等正覺された広大なご恩にむくいる行事

でなければならぬ。法然上人は本願成就ということの重要な意義を『選択集』などに示され、阿弥陀さまがもと法蔵菩薩であられたときの誓願は一々みなすでに成就され、強大な摂取のお力がいま現にはたっていることを教えておられる。上人は「かの仏今現に世にましまして成仏したもう」とある『往生礼讃』の文に対し、しばしば感涙にむせばれたという。ますます忙しさを加える今日の時代ではあるが、秋宵ひとときでも心をしずめて念仏することができたならば、一念大利の経説もあって、功德のとうとさはかり知れない。時勢は移りかわりお十夜も新暦によって行うようになり、丸うなる月をかぞえてお十夜参りする風情など味わわれないこともあり、十日十夜が三日二夜となり、今多くは一日に短縮された。同時に信仰心のおとろえも否むことができない。

ここで八王子のお十夜について、おもい出すままに少し記して見たい。大善寺の十夜法要は古くは十一月十三・十四・十五の三日二夜、私の寺では十月十三・十四・十五の同じく三日二夜いとなまれた。この両ヶ寺の地域は明治の初めまで滝山の地名をもらい、八王子のむかしの十五宿には含めず、特別な寺領となっていた。大善寺の十夜は全市を挙げての祭りでにぎわい、まちの家々では親類縁故者が泊りがけで集っ

て来るので、酒屋などの売上げはお十夜の季節が年中で一番だったと聞いている。それだけお祭り気分で楽しんだものである。商店街は軒なみ十夜会と書かれた提灯をかかげて装飾され、寺の境内には曲馬などさまざまな興行見世物小屋がくまなく掛けられ、通り筋両側には飲食店など露店が並び、客よせのラッパ太鼓でまことに喧そう雑とうを極めたものである。寺の本堂には善男善女多ぜいの参詣者が集い、特に中の日は夜のお籠りが多く「み仏の前去りがたく」というような情景も見られた。そうして昼も夜も何百かの施主のために諷誦文が読み上げられ、めいめい自分の番を待つて焼香するのである。諷誦文供養の施主や一般の参詣者は、八王子近郷の人ばかりでなく、神奈川、山梨、埼玉の他県にも及び、いわゆる十方檀である。むかし交通不便な山里の人びとが宗派を問わず、自分の菩提寺で新亡霊の供養もななかつとめられなかった家庭でも、お十夜に詣でて諷誦文をあげることが、菩提をとむらう最勝の功德だと信じていたのである。古く浄土宗高等学院長の職にもあり、大正の初めから大善寺一代であった山本大善師の諷誦文の読みふりは、まことに老練堂に入ったものでもっとも印象的である。私も小僧時代、初夜法要に随喜する師僧のお伴で行き、大善寺の手提灯を借りて、木戸銭を払わずに曲馬や珍芸などを見物したも

のだ。

長い歴史をもった名物の大善寺十夜も、寺が郊外へ移転し、近年は廃絶同様になった。土地の故老にはこれも郷愁となっている。

こちら極楽寺の十夜法要は前にも触れたように大正六年に休会になった。この寺のお十夜は檀信徒の参詣と、そこちの講中が多く集い、双盤念仏が莊重につとめられて呼び物であった。老杉大樺の森に太鼓と鉦のひびきが高鳴って

鉦講のあらかしめの十夜かな

の句のとおりだった。初夜の法要はもつともおごそかに僧俗一体でつとめられた。門中は神奈川県高座方面も含まれ、末寺や法類寺院が随喜助法も多数であった。一里ほど隔たった平山という村の平山講の人たちが双盤念仏をつとめ、袴すがたで本堂外陣に横に並んだ双盤台に坐り、太鼓と鉦で引声の念仏をさびた美声で唱えた。十夜法要中の念仏一会は外陣の講中の人が受けもつことは鎌倉なども同様で、引声念仏のとなえ方や鉦の打ち方には伝承もあったのであろう。初めは緩やかに次第に急に、それも幼少の頃のこととて、また今日ではその後継者も絶えてくわしくは分らない。

お寺方や講中参詣者のたいぜいの人に、夜は小豆飯のお齋、甘酒の供養で大へんな忙しさである。

運び来る僧みな若し十夜粥

弟子入りしたばかり幼少時代のこと、本堂の法要や諷誦文回向に番僧で坐ったり、多くの手伝いにまじって小豆飯を運んだりしたことなど、すべてなつかしい思い出である。

また仏餉米ぶつこうまいといって、新穀を紙袋に入れて施入する仕来りがこの地にもあり、人びとが豊かな稔りを感じ感謝するゆかしい心持が見られる。十五日の結願法要には、「仏餉一袋何某」と一々読み上げて丁寧に回願もつとめられた。

このようなお十夜の行事が信仰のふん囲気をただよわせて、寺として大きな法施であり教化であったことは確かである。この地で浄土宗の檀信徒はもとより、他宗の檀信徒でも家庭で仏事をいとなむのをお念仏と呼んでおり、お念仏を唱える風習が今に伝わっているのも、お十夜の感化に相違ない。かつてはこの地方の浄土宗寺院がこぞつて随喜し、一ヶ寺に代表していたかたちの大善寺の十夜も行われなくなった今日、行事のつとめ方も時代に考えてお十夜を復興すべき責任を感じるのである。



座 談 会

現代人の信仰心

信仰心は家庭のしつけから

司会 本日は長野の善光寺を訪れまして、ご法主の一条智光上人、浄土宗寺院婦人会の佐藤治子会長にご放談ということで色々とお話しをお伺いしたいと思います。ことに最近の仏教の信者の方々、善男善女の気質などにつきまして、女性のお立場からお気軽に話し願いたいと思います。

佐藤 昨日、私はこちらでお数珠を頂戴している二人の若い女の方を見かけました。お年寄の人は別といたしまして、こうした若い方々が真剣にご本尊様に手を合わせていられるのを見ますと、最近の宗教に対する考え方はやはり深まってきたと見てよろしいのかと思ったりわけですが……。

一条 そうですね。随分色々の方がおられるようですね。全く面白半分の方もあるようですが、両親共々真剣に合掌されている姿などを拝見いたしますと、やはり家庭のしつけというものが、とても大切なように見受けられますね。

佐藤 確かに家庭における教育、宗教的情操を養うというこ

ご 出 席

大本山善光寺大本願法主 一 条 智 光

浄土宗寺院婦人会長 佐 藤 治 子

司 会 編 集 部



長崎佐藤と上人公尼の談話中

一善光寺大本願にて一

とが大事なんでございましょうね。昨日の二人の娘さんは本当に感激した思持ちで、ハイキングか何かの帰り姿ではございましたが、信仰に厚い心持ちがその後姿からよく察せられました。

司会 今、よいことをお伺いいたしました。確かに親の考え方が子供に移って行くという考え方は、時代がどう変わっても大事なことです。

一条 はい。以前大分前ではございますが、小学校一年生の子がお弟子にということとこちらに参ったのですが、その小さい子が私達の作法をいつの間にか真似ているのを見ますと、私達大人の常日頃の振舞いがいかに大切であるかがしみじみと感じられました。

佐藤 実は今もこちらに参ります途中、車の中でラジオを聞いておりますと、電話相談とかの番組でしたが、全然問題にならない問題を取り扱っているんでございます。まあ、世相がこうなのだといってしまえばそれまでですが、こうしたマスコミの姿勢、いや大人の姿勢が子供達には本当に深い影響を与えるわけですね。

司会 このしつけということについて、戦前はある意味では一つの基本的なしつけのあり方があったわけですが、戦後は確かに価値観が変わりまして、そのことがまた大きな問題をも

たらして来ていると思いますが……。

佐藤 私共は、お上人様はこちから世間をお眺めになつていらつしやる、私は寺の中にあつて色々人と人達に接し、宗教家の方々にお会いもし、またお話しをお伺いする。しかしこれだけで現在の世の中は本当によいのかしらとやはり思うわけです。

一条 私共はそれこそ、井の中、いや大井の中の蛙ではございますして、世間の中のことは全くわからないといった方がよいのかも知れませんが……。

佐藤 いやしかしそうした中でこそいつもながら新鮮なご教化、お導きを頂いておりますことは、私共にとりましては大いに感謝しなければならぬことだと思ひます。

一条 いえもう恥しいばかりなのですが、ただ仏様にお仕えさせて頂く身でございますから、日々の心の持ち様はできるだけ広くありたいと願つてゐる次第でございます。

欲得ぬきの信仰心を

司会 これは少々話しがそれることになりますが、俗に「牛に引かれて善光寺詣り」といわれますが、この因縁はどういう発祥なのでしょう。現在、小諸に布引観音というのがある

ございます。

一条 あそこに欲の深いお婆さんがありまして洗濯をしておりましたところ、牛が来て、布を角にかけて走り出しましたので、お婆さんがその布を取り返そうとして後を追つて行きますとあるお堂に入りました。そこで、善光寺にお詣りするよう、お告げがあつたと受け給つていますが、観音様が牛に身に化えてお婆さんをおさとしなされたわけなんですね。

司会 いや私がちょっと申したく思ひましたのは、佐藤会長のお話しの続きでございますが、現代のこういう世の中といたつたものを考える場合、確かに現代は平和で恵まれた社会状況ではありますが、一皮はむけば人間の業の深さというか極めて地獄的な一面があるということです。これに気付かないということが、私達にとりまして非常に大きな問題だと思ふんですが。もちろん、公害問題を含めて最近の社会現象には、私達がこれまで行なつて来た基本的な活動に対した、根本の反省が要請されるようなことがあるわけですが、これを精神的情操の領分まで深めて捉えるべきだと考えるわけですね。私達の浄土教義では極楽を説きまして、一般には余り地獄を説かないんですが、先程の欲張り婆さんの話ではないんですが、人間の業の深さをもう一度お考え直してみる必要があるかと思ひます。

佐藤 そうですね。先程の車の中のラジオの話しては無いのですが、ともかく最近の人達の行動が余りにも情のないあり方なんです。今も業の話をなさったのですが、私はよく因縁論を考えてしまします。何かこうしてある私の姿が、つねに見えざる糸に動かされてあるような気がするんです。しかし、こうした悪業、善業、こうした業というものを一般の方々がもっと考えてもよいのではないかと思うんです。こうしてあらせて頂く今日を考える時、遠き因縁の深さに畏敬の念を禁じえません。開宗八百年を機会に何か自分を改める新しい目標を考えましょうということ、昨日も若い僧侶の方々にちょっと申したんですが、一つには、「ご法語」を読み直そう、二つには、「合掌」ということを強調いたしました。ガリ版刷りなんです、二、三ページの書き物にしてこれを配りました。

一条 そうしたことは大変結構なことであり、今こそ確かに必要なことと申せましょう。

佐藤 何かしなければならぬということ、合掌しましょう、合掌させて頂きましょう、合掌をお受けしましょう、という合掌には非常な倫理があると思います。見かけの上のいい加減なものではない真実の合掌の心ということをも考えたいわけです。そういう意味で、昨日のハイキング帰りの二人の

お嬢さんのお気軽な装いの中にも心のこもった合掌が、とても印象に残ったのではないかと思うんです。

うわべの信仰から真の信仰へ

一条 そうです。まあ、善先寺さんへお詣りになる方々も種々雑多で、単なる見物に参られる人々ももちろん多いわけではございますが、ともかく仏様に両手を合わせ、頭を下げるために見られる人々もおられるわけです。その姿が有難いんです。まだまだ仏教が盛んとまではまいらなくても、結構なことだと思うんです。

佐藤 全体的にそうしたまじめな姿勢の人がふえたとは思いますが。

一条 最近、そういった自分を考えるというか振り返るというか、自己をじっくりと見つめるという人が多くなったとはいえるでしょう。

司会 そうでしょうね。いわゆる戦後の変革期ということで、私達仏教の側からいえば、つとめて控え目なあり方であったわけなのですが、最近是一般の方から仏教を見直そうという姿勢を強く表わされているんじゃないでしょうか。

佐藤 そうした意味で宗門の皆様方に申したいことは、機縁

今日も参詣者で賑わう善光寺



というものを大事にして下さい、ということですね。人と人が会うということは、多かれ少かれ色々な感情が働くものではございますが、日頃みずから心に何かしら抱いている人は、そんなときと相手に影響を残すものだと思えますよ。ですから人と人との機縁を粗末にしないで暖かくはぐくみた

いでですね。

司会 そういう意味では、浄土宗のお十念は有難いですね。仏教への入口とその内容の深さを簡潔に明示していますから。

佐藤 この尊いお十念は一つの縁になるものだと思いますよ。お十念はまた教化の重要な道具立てだと思えます。先程お上人様が申されましたように、「させて頂く」という心のあり方が大切だと思うんですよ。

一条 先日もちょっとある席で申したんですが、私共は生きているのではなくて、生かされて頂いているのだから、と申しましたら、皆様偉く感激しておられる様子でした。結局、お互いが生き生かされているということを知ってはいじめて、人間と人間との本当の意味での和合があると思えるんです。まあ、そんなことをお話し申したんですが。

佐藤 本当にさせて頂くという気持、頭を低く下げ、身体をも地に倒すインドの五体倒地、あの倒地の気持で反省し、させて頂くことを感謝する心差しが尊いと思うんです。

司会 それが他力の世界の生き方ですね。実践をしておられるご両人のお話しですから、生かされている喜びは、自然に他の人を生かす道を切り開くことにつながると思えます。いろいろありますがありがとうございました。

特集 開宗八百年と私 (上)



余生の心の支え

桑 山 春 山

(浄土宗尾張教区長
名古屋市雲心寺住職)

昭和三十八年十二月二十三日、私は胃癌の手術をしました。今から思うと、その年の十月始め頃から、食事をいただくとき満腹した後ずっとなじみを感じ、横臥しなければ堪えられない状態でしたので、これはおかしいと云うのが自覚症状でした。以後、消化薬や胃腸薬を服用しておりましたが、中々治まらず、十二月初旬より園の嘱託医である加茂先生の診察を受けました。レントゲン写真の結果、心配した事は無いとの事でしたが、念のため名大佐々木教授の判定を頂き、十二日には其の結果がわかるから今一度来るようにと云う事でした。十二日に行

き、見るとは無しに見ると、机の上に佐々木教授の診断書がある。幽門が狭くなっている。「がちょう」大の大きさのうっ血があり「癌の疑いがある」ので再診を要す」と書いてあり、ぞっとしました。

遂に私にまで番が廻って来たかと思ひ、その時の表情は恐らく顔面蒼白であつたろうと思ひます。と云うのは、私の兄二人と弟一人が癌の為に死亡していたからです。早速手術をする気になったのも、兄弟の死の教訓かと思われ感謝し、その冥福を念じております。

手術を受けるにあたって終始、CBCテレビ会長佐々

部晚穂氏の奥様である正様の温情、兄正雄氏（名工大名誉教授）の一日かかさずの病氣見舞がありました。檀家黒田きぬ様は、私はあなたに引導をしてもらう心算でしたのに、あなたが癌と受けたまわって治られますよう願掛けをしておりますと申されました。執刀医の今永先生（現在癌センター病院長）は手術中、十二月と云う寒中にもかかわらず汗びっしょりになり、汗をふきながら執刀を続けられたが、そのお姿と云うものはただただ頭が下がると云う外はないと、手術の際に立ち会ってくれた寺沢兄の言葉でした。それを聞き涙こぼる程の感動、数え切れない程の感謝の思いで一ばいでした。

手術を受けてから、今年で十年になりました。その間八十二歳の黒田きぬ様のお葬儀もさせて頂き、お期待にすることができました。

又念願であった園児のための園舎の新築もさせて頂きました。命あったればこそと感謝しております。癌は早期診断が大切だといわれております。私の場合でも早期であったからよかったです。皆様も自分の体がおかしいと思われたら恐れず、ためらわず、速かに診断をうけられることを、大切におすすめていきます。与えられた生命を大切にするために。今の医学の段階では癌の治療

は手術より方法はないようです。

今永先生のお母様は九十余歳ですが、非常にお元氣だそうです。然し先生が「私の母親は九十余歳です」とおっしゃる言葉の裡には、母堂の命のあるうちに孝養を尽くしたいという切ない思いが一ばいでしょう。先生は常に盆、正月はもちろん暇を見つけて帰省され、親子共々手をたずさえて寺参りをするのが楽しいと、おっしゃった事があります。先生がお母様に名古屋に来て同居するように勧められても、お母様は郷里にあって夏といわず、冬といわず、日々寺参りするのが何よりの喜びであり、そっと置いて欲しいというのが願いだそうです。よくいう「此の親にして此の子あり」という言葉を思い出させられます。

今永先生は又、自分の死を他人の死のように考える事が出来た人々は、私の知る所では、すべて敬虔な仏教信者であり、キリスト教信者であった（昭和四十八年六月二十三日中日新聞（外科医の覚書）より抜萃）と申されています。

もしも私が僧侶で無かったら、これ程の数限りない人々の恵を受けられなかったことでしょう。余生を少しでも社会の為に尽くしたいという思いは、病氣をした者の

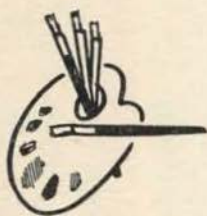
恩寵かと思われず。

よく私は人から「お元気になりましたねー」といわれますが、まったく御仏のおかげであり念仏が心の支えとなっているからだと思われず。念仏をはなれての生活というものは、私には到底考えられません。

開宗八百年も目前、命のある間に勸修せられましょう。是非共この法要に随喜したいというのが私の願いで、待遠しく思われます。檀信徒といわず縁の有る方々をお誘いして祖廟にお参りいたしたいものです。それはやがて宗祖への報恩であり、念仏信仰への確認ではありますまいか。念仏を身で味わい、体で味わう事が法然上人さまへの

開宗八百年を期し

寺庭婦人の覚悟



前田 志津

(浄土宗寺庭婦人会顧問)

わが宗祖法然上人の開宗八百年記念大法要が、来春四月に総本山知恩院に於て盛大に厳修されますにつき、私

報恩であり、即、自他を超越した同入和合海であり、世界平和への直進道であり、子孫への無価の贈りものとなります。りましょう。

開宗八百年を迎えるに当たっての大綱は当局より示されているものの、処によっては個々の方策もありましょう。そのことについては、あくまで念仏昂揚の信念のもとに、全宗侶が真摯に検討して実行すべきであります。その決定された事については、命のあらんかぎり協力すべきであり、それがお互いの義務ではありますまいか。これが開宗八百年を迎えるに当たっての私のさやかな心境であり、また切なる願でもあります。

等寺庭婦人は出来得るだけの協力をさせて戴き度いと思っております。

当大阪教区におきましても、この十月六日には、大阪寺庭婦人が開八協讃の大会を当寺において営む事になっております。

昔は寺には婦人が住めなかったのが、只今は寺にも婦人が住み、世間普通の生活をするようになりました。しかし寺は普通の家庭と違い、仏前のお給仕は勿論の事、住職を扶け、寺門の経営、子弟の教養にも大いにつとめなければなりません。

一には掃除、二には勤行と、毎日寺内を清潔にし、檀信徒のよい相談役にもならねばなりません。

近頃は法要の事でも、音楽法要がおいおいと発達してまいりまして、寺庭婦人会及び研修会等の集い、殊に若奥様方に益々見解を広め、なごやかによい雰囲気を楽しむようになってまいりました。私等大阪教区は四百名余りの会員がございしますが、結成致しましてから、早や七、八年にもなりますので、おなじみも重なり、仲よくして、これから若い方々にも精々研修会等には出て戴き、法然上人のみ教をよく勉強し、仏前のお給仕の仕方、法式等もよく覚え、寺庭婦人らしく行きたいと思ひます。

又寺庭の子弟養成には特に重大な責任があるのですから法然上人の御教えに従ひ立派な人物を仕上げるのが私

等寺庭婦人のつとめと痛感致します。又現代の既成宗教殊に仏教はおいおい新興宗教の非常な発展に押され勝ちのように思われます。

是に對して我々宗門人として殊に寺庭婦人として浄土宗の教義の理解と、念仏信仰の体験を深め、法然上人立教開宗の真精神を他に伝える熱意を以つてしなければならぬと存じます。現代科学的物質文明の進歩により、青年男女は其享樂に耽れ、都鄙を通じて遊蕩的な日々の生活を以て生甲斐の様に考へて居るようです。

名勝旧蹟や神社仏閣に群参しても、それは唯觀光目的に過ぎず、自己の信念を養う為めとは遙かに隔りがあるようです。私達寺院は是等の人々、それは若い者にはそれに向く様に、又婦人方には色々其趣味にも合せる様にして、之を利用して修養道場としての目的に使用しなければならぬと存じます。

寺の本堂は陰氣臭い老人だけが行く所という觀念を改めて、誰でも楽しんで行ける場所としたいと思います。

我々浄土宗もよい子弟をつくり、法然上人の御教えに従ひ、檀信徒にも念仏の法門をひろめ、益々浄土宗発展のため、開宗八百年を期して一層努力したいと思ひます。



開宗八百年と私

松 濤 弘 道

(栃木市万町近竜寺住職)

我が浄土宗では明春を期して宗祖法然上人の開宗八百年を記念し、一宗をあげて盛大な慶讃行事が繰りひろげられる。承安五年(一一七五)の春、四十三歳の時に法然上人は今迄叡山での厳しい修行や学習を経た後、本当に自分や多くの人々が救われる道は阿弥陀仏におすがりし、その名を称えることによってのみしかないと確信するに至り、山を下って万人救済の決意を固めたのである。

当時の世相は決してなまやさしいものではなかったことは種々の歴史書の記述する通りである。人々は絶え間ない氏族間の血なまぐさい争いや焼打ち、旱魃、疫病にさいなまれ、蜚語流言は飛び交い、一日として安閑に過

せる状態ではなかった。京の都は浮浪児、難民に満ちあふれ、鴨川の清流は血に彩られ、至るところにうづ高く積まれた死骸の放つ異臭は鼻につき、正に地獄の相を呈していた。こうした中であってこのむごたらしい世間を離れて、一部の貴族や豪族の如く遊蕩三昧にふけり、又、高邁な教理をひけらかし儀式に精通し、権勢に安住することは到底許されなかった。法然上人自らが幼少の時、父時国が刺殺された事実を決して忘れてはいなかった。それだけに、世間の人々の歎きや悲しみを高所から黙って見過すことは出来なかったのである。明日の生活も保障されず、誰にも頼ることの出来なかった当時の人々にとっては、一部特権階級によって独占され、それへ

の奉仕に明け暮れしていた既成教団の高邁な教理や儀式の恩恵をこうむることは恐らく考えられず、こうした状況の下で、法然上人が、無視され、悲歎にくれる多くの人々に万人救済の手を差し伸べたことは正に旱天の慈雨の如きものであらうと推察される。

法然上人がこの救済の道を示したことは決して自己の名利を人々に押しつけ、既成教団や政権を打倒する為ではなかった。あくまでも自己の体験に基づき、自ら納得したことを人々にもすすめ、共に念仏を唱え、共に往生することのみを説いたのである。法然上人はかつて「八宗九宗の他に浄土宗の名をたつことは自由にまかせてたつること、余宗の人々の申し候おぼ、いかが申し候べき」と問われたことがあった。その時、「宗の名をたつことは仏説にはあらず、みずからこころざすところの経教につきて、存したる義を学しきわめて、宗義を判ずる事也。諸宗のならひ、みなかくのごとし。いま浄土宗の名をたつる事は、浄土の依正経につきて、往生極楽の義をさとりきわめたる先達の宗の名をたてたまえるなり」(十二問答)と述べている。自分勝手に宗義を立て、立宗したのではなく、先達の道に直参し、その中から専修念仏の教えを自ら選びとつたのである。この精神は、

単なる知識を吸収し、その高下を云々する学者ではなく、そこまで追いつめられた厳しい体験の持主でなければ到底得られないものである。ここに知解よりも体験、不信より信仰に至る一大精神的転機がうかがわれる。

末法の世にあつて、まともな生活をしたくても出来ない自分の罪業の深さにおのき、ひたすら念仏することによって欣求浄土を目指した法然上人は全ての權威主義、形式主義を否定し、知恵第一と叡山で将来を嘱望されながらも、その名を捨てて一介の破戒僧として自ら称名念仏の行を實踐し、人々にもすすめる人であつた。故に臨終間近となつて周囲の弟子達が上人の遺跡を建てたいと申し出たところ、「あとを一廟にしむれば遺法あまぬからず」とてこれを強く戒め、念仏の声あるところが即ち遺跡であると述べていられる。皮肉なことに、この上人の固い諫誨にもかかわらず、後世の人々はその人徳を慕うあまり、本意に反して上人を奉り上げ、歴代の天皇は多くの大師号を下賜し、歴代徳川家の庇護の下、大伽藍が建立され、時代を経るに従つて上人の遺徳は教団のかげにかくれ、雲上人の地位に追いやられてしまつた。こうした逆説的真理はどの教団の発展の歴史を繕つても大なり小なり避けられない事実である。しかし、かつ

好 著 紹 介

花山勝友著 『学生のための仏教入門』

新書版二二六頁 価五〇〇円

てリーベルマンが喝破している如く「才能が終ると形式が始まる」ことをも知らなければならぬ。形骸に惑わされてその内容を見逃すほど悲しいことはない。仏教の本筋はあくまでも師資相承である。かつて法然上人が偏依善導といった如く、又、その弟子親鸞がひとえに師法然をしたった如く、自らの生命を預けることの出来る尊敬すべき師匠に出遇わない限り、そしてその人格に触れない限り仏教の何たるかを知ること出来ない。我々にとっては法然上人の御許に直参し、そのたどられたと同じ道をたどらない限り、決してその偉大さを感得すること出来ない、その偉徳を顕彰することも出来ない。

八百年の歳月のへだたりがあるとはいえ、当時の世相と酷似した今日の時代を省みる時、我々は上人の苦心を我が苦心とし、その痛みの万分の一でも自分の痛みとしない限り、決して上人を知ったことにはならず、ましてや浄土宗侶の資格さえもない。その意味で、学問栄えて仏道すたり国栄えて民滅びる寸前の今日の状況にあって、我々は一人ひとりが法然上人の存在の原点に立ち還り、きびしく自らを問う姿勢がほしいとつくづく考えるこの頃である。

現代の世相はまことに混沌とした様相を呈している。ひとそれぞれが、この目指す目標に向って、日々努力をかさねている訳であるが、何かその目標すら失わないうちでいる面も見うけられる。これは何に起因しているのであらうか。確かに、あの戦乱の荒廃からすばやく立ちあがり、たゆまぬ努力の結果、今日では多少の不満はあるにせよ、物質的には恵まれた生活を送ることができるようになった。しかし反面、精神的に欠如した人びとがなんと多いことか。

この本は、そうした方向を失わないうちでいる人びとの生きる道標として遠い昔より日本人の心の中に生きつづけてきた仏教を、今改めて見直し、心の糧とするために書かれたものである。若人に限らず、是非一読したい好著である。

発行所 仏教書林 中山書房

東京都文京区湯島二一十四—四
電話(〇三) 八三三—七六七六

選釋集講話

第八章 三心篇

佐藤行信

(大正大学助教授)



法然上人の書かれた選択本願念仏集の第八章段は三心篇です。この章は、浄土宗という安心、起行、作業の中心の安心に相当するもので、浄土宗信仰の要です。第一章から第七章までは安心を起すための章であり、第九章以降は安心をもって如何に生かすかとみてもよいと思います。ともかく如何なる念仏の功德も、安心（信仰心）なくしては出来ません。すべては安心を起すためにあり、また安心を実践するためにあるもので、安心こそ重要なものです。「念仏の行者、かならず三心を具足すべきの文」の標題ではじまるこの章は、念仏の行者の信仰成就をせしめる条件の問題について論じてます。法然上

人はこの章については善導大師の御見解をそのまま紹介され、御自分の解釈は、ほとんどつけ加えておられませんが。浄土宗における三心論は、観無量寿経第十四の上品上生の文です。上品上生の者はいかなる実践をなす者かという、それには四種類あります。

一、至誠心と深心と廻向発願心の三心あるもの
二、慈心あって、無益に殺生をせず、仏教徒の戒めを守るもの

三、大乘経典を誦誦するもの

四、仏、法、僧、戒、捨、天の六念をなすもの

この四種類の中のいずれか一つに相当するものが上品

上生者といわれています。一見するところ、一般人にとってさほど厳しい生活でもなく、平凡な善良人と考えられますが、これは浄土往生人の第一級の相当者です。この三種の心、至誠心、深心、廻向発願心が浄土宗における三心です。この三心の解釈をなさったのは善導大師であり、それは観經疏散善義等に詳細に述べられています。浄土宗では、三心を具備すれば、必ず往生することが出来ます。

この三心は即一なものでありますから、深心から振りがえって至誠心の意味づけをしなければなりません。浄土宗の信仰心を分析して、その土台になるのが至誠心です。信仰は具体的にどのような態度をもったら良いかということを示したのが深心で、それによって信仰生活を実践するのが廻向発願心です。

まず最初の至誠心とは、善導大師は、至とは真、誠とは実、真実心のことであると解釈されています。解脱を求める一切の行は、この真実心に基づかなければなりません。しかしこの真実心にも二種あります。即ち、煩惱のある心の有漏真実と、煩惱の混じっていない純粹な心の無漏真実とあります。浄土宗の立場からみて、凡夫有漏

真実であります。至誠心は一向に真実なことです。口に南無阿弥陀仏と称名しながら、心の中は少しも仏に合掌してないようなことのない、真実で、身の内外に嘘のない、真実心、正直な心のことです。真実心が往生の決定的な条件となるのは、それはまさしく阿弥陀の行のうちに実現されているからであります。法然上人は、倫理的な努力を救済の条件とすることは、退けましたが、真実心より善の実現に向うことまで否定していません。信仰上の安心を決定したものが、おのづから倫理的な善を行わざるを得なくなるのは、信仰そのものの内にひそむ必然性だからであります。単なる世間的な誠心だけでなく、結局、深心に対する至誠心であるから、他方に対する自分の信頼感を持たなければなりません。原始仏教では、身器清浄ということを言われますが、これは肉体の清潔ではなくして、全く私とか自我を無くして、素直に仏教の教えを受け入れることであります。至誠心は阿弥陀仏の救済に対する身器清浄とも言えると思います。

次に、深心、これは深く信ずることでもあります。深く信ずることには二つあります。一つは、自分が罪惡生死の凡夫であり、常に流転してとどまることがなく、この

現実の生死を繰返す迷いの世界を離れることのない存在であることを、深く反省することです。もう一つは、阿彌陀仏が生ある一切のものを救おうとして立てられた誓願によって、自分が必ず救われると信ずることです。おのれが必ず救われると信ずることは、阿彌陀仏が衆生のために四十八願をたてたことを深く信ずることであり、更に願力に乗じて衆生は必ず往生することを信じて疑わないことです。このような深心は、善導大師の觀經疏の記す所によりますと、最初の方、つまり、自分は罪深くして、生死を出でて成仏する手段のないものであるという自力の無力を信知することを、機の信とし、あとの仏力と往生の行を信ずる、即ち、その中の仏力を信ずるを就人立信と言ひ、法の信とします。善導大師の往生礼讃をみますと、今述べた趣意をさらに要約しています。それによると、深心は真實の信心でありますが、その信の内容は、まず自分自身は煩惱具足で、善根が極めて少いから生死流転から自力で出で難いと信ずる（機を信ずる）ことと、阿彌陀仏の本願力が衆生を救済するためのものである（就人立信）ことと、及び阿彌陀仏の名号を十声一声なりとも唱すれば往生を得る（就行立信）こととを、深く信じて疑心あることなきを深心としています。

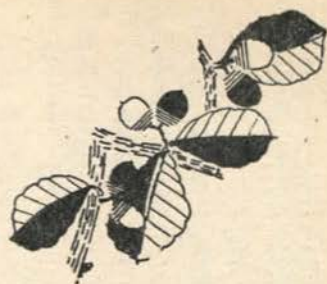
この説明で、善導大師の最後の趣旨とされる所は、阿彌陀仏の名号を十声一声するだけで必ず往生を得ると信ずること、称名正業中心であると知られ、その称名往生の誤りなきを信ずるを深心の眼目とされていることが知られるのです。それ故、罪惡生死の凡夫は、ただその弥陀の愛に身心をあずけて、弥陀の無限の光に浴しさえすればよいのですが、弥陀の愛につつまれることは、法然上人によると、念仏一行に身心を投げ入れることに他ならなかったのです。法然上人の説く深信は、このように罪障の自覺が救済の絶望をくぐることによって、再び窮極において念仏往生の救済に結集するという構造をもつてあります。法然上人は、罪惡生死の凡夫の救われる可能性を時と機に相應する教えにもとめました。釈尊が韋提希夫人および五濁惡世の凡夫のために示したのが「觀無量壽經」でありました。觀經をはじめ、他の淨土經典は、末代の衆生の劣惡な機根のために与えられた釈尊の慈悲だということです。法然上人の淨土宗が末法仏教として成立する根拠はここにあります。

第三の廻向發願心ですが、善導大師は、「過去及び今生に、自ら身口意業に修する所の世出世の善根、および

他の一切の凡聖の身口意業に修する所の世出世の善根を随喜し、この自分と他人との所修の善根を以て、悉く皆、眞実深信の心中に廻向して彼の国に生ぜんと願ふを廻向発願心と名づける。」と説明してありますから、自分の作した身口意三業の善根は勿論のこと、他人の善に随喜した善根迄もことごとく、往生のために廻向して往生を願うのが廻向発願心であるとせられたのです。善導大師は一応以上のように説明して、往生を願うために一切の自他の善根を、「往生の爲にする」となす心が廻向発願心とされますが、これは曇鸞大師の往相と還相の二廻向の中の往相廻向の心に相当する部面に関して述べられたものであります。そこで、善導大師は還相の廻向心についても、觀經疏で、「廻向と言ふは、彼の国に生じ已りて、還て大悲を起し、生死に廻入して衆生を教化するを亦、廻向と名づく。」としています。また、善導大師の編せられた往生礼讃の發願文には「彼の国に到り已りて、六神通を得て、十方界にかへって、苦の衆生を救摂せん」とあります。すなわち觀經疏の文も、往相の廻向心で浄土を願うのは、ただ往生することのみ願うのでなくて、浄土に往生したならば、浄土において、この現世の生死に悩めるものを救済する力を獲得して、その上で更に

現世に還り来て衆生を救済するという還相廻向のためであつて、この還相廻向の意味がまた廻向心には含まれているのであるとするものです。善導大師の廻向発願心には曇鸞大師の場合と同様に、往相と還相との二廻向がありますが、しかし曇鸞大師の場合は、無上菩提心を起すことを強調せられて、菩提心の上にこの二つの廻向心が現われるものとせられたのですが、善導大師の場合には、菩提心を発することはいってません。もともとこの廻向発願心は、第十八願の「欲生我國」に相当せしめる願生心であるし、また觀無量壽經の九品中の上品上生者の廻向発願心も、特に菩提心に関係していないものでした。そこでいま至誠心と深心と共に生ずる廻向発願心や、特に菩提心と深心と共に生ずる廻向発願心は、菩提心もなき凡夫に発さしめる心でありますから、これを菩提心を前提とした廻向心とは言わないのであると考えられます。しかし菩提心と言わずとも、實際は菩提心であり、また浄土に往生すれば、浄土の生存の必然として、事實上菩提心の菩薩行を成ずるようになりますから、菩提心であるべきです。

以上述べた三心は浄土を願う心の有り方を規定したものであり、心の落着け方です。



念仏弘通の兄弟

—以八・袋中両上人—

念仏人と歴史

平 祐 史

(仏教大学助教授)

—

頃は天正の中頃と思われる。丁度、織田信長が本能寺で薨じて、秀吉がかわって天下を握ろうとしていたその頃である。風光明媚な瀬戸内海に浮ぶ安芸の宮島、その神域の東の岡に島民が岡の庵と呼んでいる草庵に、専ら世俗と離れて念仏に明けくれる以八上人(一五三九—一六一四)があった。そうしてこの草庵を訪ねる壮年の学僧があった。かの学僧は、岩城の城主に請ぜられ、その菩提院の院主となっている袋中上人(一五五二—一六三九)である。この二人は兄弟で、以八上人は兄に当る。久し振りで逢う兄弟の話題は尽き

ることなく、恐らく浄土の法門について話が交わされたのであろう。そのうち、弟の袋中上人が、明国に渡りたい旨をもらされたところ、これを聞いた兄の以八上人は、急に厳しい口調で、

「お前は、日本に伝来する経論章疏をあますところなくよんで、これを理解できたか。もし理解の上で、未だ解決できない問題があるならば、明国に渡ってよいだろう。」と云い、さらに言葉を重ねて、

「お前は、行雲流水に身をゆだね万里の道を歩んで、年月を重ねて多くの国々をめぐり、たとえ善財童子のように五十三人の善知識に逢うとも、称名念仏の功德が万行に勝る

を知るだけのことだから、みだりに迷うようなことがあつてはならない。」

と諭され、さすがの袋中上人も、兄の以八上人の高論に服し、遠遊を思いとどまったと伝えている。

以八上人は、称念上人と同様に、世に云うところの捨世の系譜を引く念仏者で、常に身を雲水にまかせて、一定に所住せず、時にしたがいい所にまかせて念仏を弘通するという人であった。そうして美作の宗祖法然上人の誕生の遺跡たる誕生寺や筑後の二祖鎮西上人の旧跡を参拝し、祖跡の復興に奔走し、専ら名利を厭い、衣服もあら木綿の粗末なものをまとうという勇猛精進の念仏者であった。それだけに、その信仰生活上のエピソードもかなり多く語りつがれている。

二

ある時、以八上人はさる禪寺に下僕になりすまして住みこんでいたときのことである。上人が風呂の湯をわかしながら、一心に念仏を唱えているのを聞きつけたその寺の禪師が、風呂桶の内より、

「お前さんは、浄土宗の者だな」

と声をかけた。上人は正直に、

「いかにもその通りでございます。」

と云うと、禪師は、

「それならば、お前さんの祖師である善導大師のように、口から仏を吹き出してみせよ。」

と難問をぶきかけたのだった。上人はすかさずこれに答えて「それじゃ禪師もまた達磨大師のように、蘆にのりて川をわたってみせて下され。そのとき、私も仏を吹いてみせましょう。」

と、まことに鮮やかな答で、さすがの禪師も閉口したということである。

三

一方、兄の以八上人に明国渡航の志を諭された袋中上人も凡庸の人ではなかった。慶長八年ついに長崎におもむいて、便船を待っていたところ、とある僧が袋中上人に、

「最近多くの仏書が輸入されていますが、貴僧は被見されましたか。またそれをそらんじられていますか。」

とかつて、兄以八上人に云われると同じような質問を受けた。上人は即坐に

「はばかりながら拙僧はそれらの書物は全部読み、およそ大小権実の経論中の大事な文句は全部そらんじております。」

と答えた。するとその僧は、とある経論の題名を指して

「このお経はどうですか。」

と問うたところ、上人はその経論の大切な文句を逐一に誦され、それはあたかも瀑河の流れて速かなることくであったという。そうして上人は、かの僧に、

「拙稿は渡明の志があるために、このように勉強したのです。」

と云われたと云う。このことは、かつて以八上人に渡明を諭し止められたことが忘れがたく、仏典の研究につとめられ、その上あらためて明国渡航を志されたことをよく物語るものである。

こうした渡明の志も役人の拒むところとなつて果さず、やむをえず琉球に渡り、念仏の弘通につとめられたのであった。幸いにも国主黄冠馬幸明が上人の徳風を慕い、桂林寺を建てて上人を招じたので、上人はこれを拠点として大いに教化の実をあげられ、ここに浄土宗における琉球開教の最初の足跡を上人がしるされたのである。上人の琉球掛錫中、「琉球神道記」「琉球往来記」などを著わして、国主に献じ、琉球の文化活動に貢献されたのであった。そうして滞留すること三年帰国のうち、慶長十六年京都三条に法林寺を創建し、かつて白旗派の京都進出の拠点であった望西棲了慧の遺跡を

真寺をここに復興するなど大いに浄土宗の念仏興隆に寄与するところがあつた。しかし、この頃慶長十四年には薩摩の島津家久が琉球を侵攻し、そして従属せしめ、同十五年には俘となつた琉球王尚寧が津島家久に伴われて駿府に到つて家康に謁している。琉球に愛着をもつ袋中上人の胸中は如何がなものがあつたらう。

元和五年には、洛北の水室に隠棲、その後さらに山城相楽郡の西尾や瓶原（みづのぼら）などに棲むなど里人の教化に心をくばるとともに、多くの著述に力を注ぎ、また所住の地に寺院を建立されるなど、新しい時代の教団形成に果された役割もまた大きいものがある。

上人は晩年、山城相楽郡瓶原の天神の社のほとりに草庵をむすび住んだが、寛永三年の春の彼岸の中日に、六字の名号にそれぞれの法名を書き加え、参詣の庶人に授け、鳥居の下石段に立つて、十念を授け称名の功德をこまやかに説いたので、群集の人びとは大いに喜び、上人に帰依したといわれている。この名号を「瓶原の名号」と呼んで、村人たちは後世に至るまで大切に保持したと伝えている。

四

以八・袋中両上人は、奥州岩城の出身で、ともに幼年にし

好 著 紹 介

全日本仏教会関西事務局編

『お 寺 と 税 金』

定価三五〇円 送料八〇円

遠い昔から日本民族の心の糧として、日常生活の中に浸透してきた仏教も、昭和二十六年の宗教法人法施行以来、その運用面で多くの変革をみた。本来はこの法律をもってその活動を助長することが目的であったにもかかわらず、今日までそれをさけて通るのが上手なやり方であるかのような、全く間違った見方がまかり通っている。ことに税法上の問題となると首をそろえたように、何かなんだか全然分らないという答えがかえってくる。これでは適正な寺院運営をしているとはいえない。本書はこうした問題と真正面から取りくみ、日頃起りやすい事項を一問一答式で九十六題を抽出し、わかりやすく説明している。法律にそくした寺院運営の伴侶として、是非手もとにおきたい必携の書である。

京都市下京区花屋町通西洞院西入

発行所 永 田 文 昌 堂

電話（〇七五）三七一一六六五

て、同国能満寺に住む叔父の天蓮社存洞について出家し、のち名越の学林として有名な大沢の円通寺で宗学を修めたが、兄の以八上人は、廿八才のときに師籍を辞して廻国遊行の旅に志し、その間、いろいろな不思議を見ることによって、学侶となれば名譽のためにしばられ、寺に住すれば檀越にちかづき利養のやいばのために害せられることを感得され、専ら雲水に身をまかす念仏の生活が続けられたのだった。旅中における奇事を八度もみられたので、それによって捨世の志が高まり、その故に、自から以八と称されたと云われている。

一方、弟の袋中上人は、大沢での修学ののち、しばらく学徒の教養に力を注がれ、二十五才の春に江戸増上寺に掛錫して修学し、また足利学校の講席に連なるなど、大いに学問研究に力を注がれたのだった。三十才の秋には、故郷岩城平の城下鎌田川の橋供養の際の梵字論争に真言の僧徒のあやまりを排せられたり、五十二才の琉球開教、帰国後山城における庶人の教化、それに加えて甚大な著述などその生涯の業績は数えきれないほどである。

ともあれ、以八上人は流雲にまかせて中国地方に、袋中は学問を続けつつ、名利に堕さず遠く海波を越えて琉球まで、それぞれ念仏の弘通につとめられ、その輝かしい兄弟の業績は念仏教化史上不滅のものとなって、今日に至っているのである。



異僧真覺

第二十回

柴田六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

文化十二・十三の二年続きの大水害は唯さえ苛斂誅求に喘ぐ百姓に大打撃であつた。その上に襲つた十四年の大旱魃は彼等に止めを刺そうとした。諸国に一揆が頻発した。百姓の生きる為の最後の手段であつた。幼少の頃百姓の世界に生き、今も又彼等と共にある真覺はじつとして居れなかつた。檀徒に保管を依頼していた年貢と蓄米合せて四十五俵を粥に炊いて東海道の往還で乞食は勿論旅人の何れを選ばず供養した。一戸に一人宛の檀徒の奉仕でそれは行われた。枯れた芒のようにつつ立っている彼等の田を横目で見乍ら

「和尚さんのする事結構なことやが斯うして縁もゆかりもない人間に施してしまわんでもええのに。俺等も来年にはどう

なることやら判らん。来年も又こんな年やったら檀家はおろか村中乞食や。そんな時此の米があつたらどれだけ助かるか知れんのに」

囁き合つたが、青白くむくんだ顔で蹣跚と供養所に群る人を見ると、何も言えなくなつた。飯碗に一杯宛の施してあつたが、それでも一刻の飢を満たす事が出来た。真覺は自らも之を手伝い乍ら

「この粥は阿弥陀様が下されたのじゃ。念仏しなされ、一遍でよい、一遍でよいから念仏して頂きなされ」

そう言い、自分も念仏を称えつつ粥を配る彼は、我勝ちに地と手を差出す人人の姿に餓鬼道を見た。かつて京の火事で地

獄絵を見た彼は肅然として襟を正さずにはおれなかった。
(誠に仏典にある如く、此の世は火宅であり、人生安き処有ること無し) 祖師の言葉が甦って来た。(世の人の多くは、その人生の真の姿に目を覆って右往左往し、迷い惑い、束の間の楽を追ひ、遂に満たされざる不満の中に世を去って行く。何と哀れなことか。此の世の計り難く、定め無きまことの姿を明らめ、弥陀を念ずる時、始めて何事にも煩わされること無き力強い人生が歩まれる) それを一人でも多くの人に伝えねばならぬ。拙めねばならぬ。これを為さずしては寺に



真覚自作の墓

住する資格は無い。俺は果してどうだ生来の呻吟で一席の法話も出来ず、さりとて其の意を文章に、或いは一首の歌に托して伝えることも出来ぬ。法賊と云うが、俺こそ正しく法賊と云わねばならぬ。

四十五俵の米を粥に炊いて施米する布施業は半月近く続いた。連日焦々と暑い秋の陽に灼かれて往来に立ちつつ自戒し懺悔する彼であった。

その後も毎日仏像彫刻に専念する真覚であったが、作業しつつ声を勵まして念仏した。専心念仏の中に仏像を刻むことがその仏像に魂を入れることであった。それは彼が魂を入れるのではなく、仏が自らその像に魂あらしめるものである。彼はそんな論理を弄んだ訳ではないが、それを自然に感得していた。

彼は売名の為にした施米では無論なかったが、その行為は近來稀な菩薩行として巷間に知れ渡り、斯る高僧の手に成る仏像こそと、彼の作を需める人がひきもぎらなかった。同じく彼ら施米に感激した或る老婆(名は伝わらない)は冬の夜の手仕事に織った木綿で白衣を仕立てて寄進したが、何時迄たっても着る様子のないのを不審に思った。

「これじゃ」

真覚は白とも鼠ともつかぬ着物の袖を示した。真っ白では

すぐに汚れてしまふからと、薄く溶いた墨水につけて染め上げていたのである。万事その調子で、いやしくも身を飾り美食を追うことは絶えて無かつたし、一紙半銭の無駄もなかつた。幼少の頃万福寺の竟空院主に訓された五戒を彼は生涯忘れることが無かつたのである。

文政五年から七年にかけて彼は、かつての念願に着手した。荒廃した寺は修理を要する箇所は際限がなかったが、彼は先ず本尊を祀る内陣の修理に掛つた。湿気と虫の為に踏み破れそうになっている鏡板を張り替え、厨子の箔を置きなおした。次で欄間に竜と波の彫り物（これは京の彫物師を頼したが）その枠はすべて黒檀を用いた。（此の、寺には不似合に豪華な欄間を見る者を驚かせた）

文政八年。還歴を迎えた彼は、六十年の春秋を回想して、僧衣をまといつつ遂に無為に過ぎた過去を懺悔、自らの愚鈍を愈々怨んだ。「沙門に似て全くの法賊也」と懺愧の叫びをあげつつも尚、日課称名六万遍の功德を以て極楽に往生し、還り来つて普く衆生を済脱せんという高志を一六八字の碑文とし、かねて実父清次郎と等しくからんと祈念した九月廿六日を自身の命日として自らの墓を刻し、庭を隔てた竹藪の側に之を建立した。

名号を刻した塔身を蓮台に受け、その下に自信教人信の偈

を、側面から裏にかけて前記碑文を刻んで二段の基礎の上に置いた。基礎の二段目には横書に「真覚西堂」と彫つた形のよい無縫塔である。

翌る九年は安永六年十月に四十五才で逝つた母の五十回忌である。彼は又両親追憶の文を草し之を自ら刻した縦三尺横二尺の碑を、彼の生地であり両親墳墓の地一里山に建立したが于時文政丙戌九月廿六日

廓誓真覺

造立之

と、これも又父清治郎の命日を以て造立の日とした。斯く迄父と父の命終の日に拘涙する理由は判らないが、彼を仏門に入らしめた蔭の力として父に限りなき感謝の心を持っていた為であろうか？ この建立に力を併せた親族十人の名は碑の台庫に記されている。

翌る月の十月十七日は母親の五十年目の命日である。此の日の供養の為に春から膳所の画工岡本丈助に依頼していた阿弥陀經曼陀羅二幅が出来上つて来た。一は父の追善の為のものであったが、偶々其処へ来合せた檀徒の中谷五良兵衛の懇望で、これを彼に譲り渡した。その代りとして真覺は其の場で来迎曼陀羅の製作を丈助に頼んだが、自らも憧れの浄土の姿を画き度いと丈助から借用した祇園精舎図の模写を始め

た。それは恵心僧都筆と称する勝尾寺所藏圖の複製ではあったが。

明け暮れ勵む仏像製作の傍らの模写である。遅々として捗らなかつたこの絵は翌々年文政十一年十月漸く完成した。小幅乍ら精緻を極めたものである。

彼は欄間に続く莊嚴の具として、且は彼の信仰の披瀝、説法に代る者として頻りに聯を彫つた。釈迦の最後の説法を録したといわれる遺教經の一節。弥陀の讃歌、礼讃の句々、淨土教に曰く^{ことば}として彼の把握した淨土教義の枢要等を高さ一間余の板に細々と彫りつけた。

聯の文字を彫りつつ彼は考えた。来る年も来る年、(父と同じ九月廿六日に命終すると云う)念願は果たされない。これは一体どうした事か? 九月廿六日にお迎えを頂くというのは、何時の間にか理由も無くそう思い込んで了つた俺の妄想なのか、いや俺は一度思い立った事は必ずやって来た。俺の一念は通るのだ。必ず九月廿六日にお迎えを頂く事は疑い無い。但し未だそれが無いのは、俺にもっと成すべき事が遺されているのかも知れぬ。そういえば幼少の俺を育ててくれた治兵衛家に遺る写経も書き上げねばならぬ。

その家は治兵衛父子は既に他界し、今は真覺の実兄が入つて家を継いでいた。子供の彼を白い眼で睨んだおちまももう

亡い。(思えばあの白い眼も俺を仏道に入らしめる弥陀のはからいであつたのかも知れぬ)彫刻の暇をぬすんでは筆を執る彼の悩裏にはもうおちまの白い眼は無かつた。

十八才の彼が大蓮寺で修業の傍ら始めた写経は、様々の運命の翻弄の中にも数行づつ書き継がれていた。正信偈。和讃。御文章。三部經と、淨土教の枢要を尽く書写し終えたのは天保三年である。彼はこれを予て京に注文していた仏壇と共に今は治兵衛を名乗る兄に届けた。養父母への恩徳報謝の爲である。写経は自作の經函に納め、その裏に小刀で彫りつけた。

仏壇御道具不殘御文和讀三部經

為三界万靈六親菩提

寄附者也 代金四両壹歩三厘銀三十目

千時天保三辰七月六日

大江 善住寺

龍譽真廊

寄附する物品に代価を彫りつける処誠に彼の面目躍如たるものがある。御文写章の奥書には

龍子龍譽真覺

行年六十七才

授与舎兄深田治兵衛者也
と認めた。

道

高野への道

真言宗の総本山である紀州の高野山は、弘法大師の開創の寺であるが、その寺域は広い。

金剛峰寺のある諸堂の建ちならぶあたりから、山内の寺々の前を通っていくと、そこからいわゆる高野の名所となっている墓がつづく。

その奥にあるのが、弘法大師をまつる奥の院である。

墓石の数は何万基あるか知らない。大小無数の墓がならんでいる。諸国諸大名のすばらしい墓は、権力そのもののような感じもする。

墓石のならぶなかを歩いていても、墓というよりも、むしろ何かの展示会のような、あまりにもいろいろな墓石がある

高橋良和

ので、それにみとれるほどバラエティがある。

その墓石のならぶなかに、四季に花がささげられ、大きな角塔婆が供養されている墓が目につくと思う。

それが法然上人の御廟とつたえられている。

どうして上人の御廟がこの高野山にあるのだろうか。

法然上人の伝記を調べても、高野山に登ったような記録をみることは出来ない。然し高野山につたわる話のなかには、上人が高野に登山している。

それは鎌倉幕府を開いた源頼朝が建久六年(一一九五)に、この高野山で源平両氏の追悼会を修行したときがあった。そのときに法然上人は、源頼朝の請いを入れて、この山にきているということである。

そのときここに五輪の石塔を建てて、自ら梵字で源空と刻んだといわれている。

そして法然上人入滅後、弟子たちが嘉禄の法難の際、西山栗生光明寺において遺骸を荼毘し、その遺骨をそれぞれ分け

て捧持していたのを、この高野の地に納めて廟をつくったということがある。

高野山の御廟につたわる話は以上である。

これについて高野山に不断念仏の道場があったことを知っておく必要がある。

四十八巻伝の第十六に、明遍僧都の巻というところに、高野山の明遍という学僧のことが記されている。そのなかに、籠山三十年の間、朝には自誓の戒舎利講、夕には臨終の行儀を修し、総じて六時の同音念仏、日々夜々におこたることなし。

とあり、自行には一向称名の外他をまじえずと、求道の人である明遍のことが出ている。

このほか俊乗坊重源もこの高野山に登山しているし、円通山律蔵院という寺が僧侶の修行の道場であり、不断念仏を修したところである。

法然上人の弟子である熊谷蓮生房も、ここで十四年間念仏を修したというのであるから、ひよっとすると、法然上人もここに登山したのである、という説も出てくる。その真似のほどに知る由もないが、もしそうであったとするなら、法然上人の御廟がここにあっても不思議ではないといえる。

また熊谷蓮生房が、上人の滅後ここに遺骨を捧持してまつ

ったということも考えられる。どちらにしても、高野山の聖域に上人の御廟が今もなおあることにはまちがいが無い。

高野春秋をみると

建暦二年（一一二二）正月二十五日、浄土宗の法然上人遷化される。末實等五輪の石塔を奥の院に創立す。熊谷入道蓮生の石塔亦之を建、未だその施主を考えず。

とあり、師と弟子の墓がこの高野に今もなお残っているし、熊谷蓮生房ゆかりの熊谷寺もある。

そしてこの熊谷寺には、法然上人が高野に登山した際にここに滞在したという。その一つとして、法然上人自作の像を安置しているし、姿見の井戸が今もある。

近年この寺に浄山の石橋法主の額がおくられている。大阪一心寺の故加藤真瑞上人が、あっせんしたようである。

極楽もかくやありましあら楽し
はやくまつらば、南無阿弥陀仏

高野は密教の靈山である。

そこに念仏の声がする新別所という律蔵院があったこともあまり知られていない。念仏生活をする人々が、ここで静かに道を求めたのであろう。

そこに法然上人が存在しても、何等不思議はない。それでこの御廟もそのようにみると、意義は深いと思う。

浄土宗の国宝

知恩院の古写経

知恩院には前回私が紹介した「上宮聖徳法王帝説」をはじめ貴重な古写経や古版経が多数収蔵されている。国宝の菩薩処胎経・大楼炭経、重要文化財の海竜王経・大唐三藏玄奘法師表啓・超日明三昧経・天平年間写経生日記等々枚挙にいとまがない。

今日これらの多数の古写経・古版経が知恩院に伝わっているのは、知恩院第七十五世順譽徹定師の功績によるものである。師は養鶴徹定の名で広く知られているように、福田行誠と並んで明治初期の浄土宗を代表する高僧である。徹定師は宗政面でも立派な仕事をされているが、学問的な方面での手腕が著しい。師は特に歴史学の造詣が深く、歴代高僧の筆蹟を求めて浄土宗寺院は言うに及ばず、全国の有力寺院を探索されている。今日我々が史料調査のため浄土宗寺院を訪ねると、そこには必ず鑑定書が墨痕あざやかに残されており、師

の限無き探求心にはただ敬服するばかりである。師はこれらの史料調査のかたわら貴重典籍の保存蒐集に意を尽された。そして師は苦心して集められた貴重典籍を知恩院に寄納された。そのため知恩院は貴重典籍が多数現存しているのである。師のコレクションは今日国宝や重要文化財に指定されているものが多く、師の鑑識眼の確さを物語っている。

今回ここに写真を掲載したのは徹定コレクションの中の代表的な古写経である国宝の「菩薩処胎経」と「大楼炭経」、それぞれの巻三の末尾である。

「菩薩処胎経」はこの奥書によると、中国の西魏大統十六年（五五〇）に書写されたものであり、仏弟子陶件虎等三十人が浄財を出しあつて整備した陶闡寺の大藏経の残巻であることがわかる。これは敦煌出土の古写経を除けば、奥書のある写経としては世界最古のものとされる非常に貴重な古写経である。

「大楼炭経」は奥書によると、自村江の戦いで日本軍を敗った新羅の援軍唐の水陸軍の大將である蘇定方の息子蘇慶節が亡父の七回忌にあたる咸亨四年（六七三）に追善のために敬造した一切経の一巻であることがわかる。両方共に中国の由緒正しい古写経であり、中国の書道史を研究する上にも貴重な書体である。

大及震動料毫波旬持諸兵衆而沙磧石雷
電震吼不能令吾動持一毛何以故慈眼普
遍應衆生故得成作佛大通清微余持世尊
而說偈曰

凡夫門通通 猶如諸飛鳥 有翅有足 不離地
能通凡法 真實無誑 合則對十方 注念念德
以具念生 得通凡法 他人入通慧 轉通覺
此通覺 要入涅槃門

余時世尊與妙勝菩薩說此法時有百七十
億衆生捨俗入通得大通慧

菩薩處胎經卷第三

大觀十六年歲次癸卯八月丙寅日壬子時行
少等星光臨無量壽門祇摩多龍洞寶雲山間
蘭子靜處心摩羅人觀照而面尊嚴貌如金身生身如
供養對靜觀三十二相諸佛現處北方寶樹法界四生身
後七寶像身靜觀融智道

一經譯一經六卷本

校 佛

菩薩處胎經

大樓炭經

七重流水泉函中有青紅白蓮華散沙時
金銀次七重巖樹力不樹木周而圓繞有青
紅黃白樹生樹生華葉實上有種種飛鳥甚
好相和而鳴其多尸利阿酒輪城中有大
樹名爲畫過度高十二万里周而亦十二
里根深二万里葉闊四万里常有華實妙多
尸利阿酒輪身高二万八千里四千里有
高二万里有高方六千里有鳥二十里有
高八千里有七層者長六層有五層者四層
者三層者二層者一層者長層多尸利阿
河須輪宮有四品常待風持之何等爲四一
者不可壞風二者堅住風三者待風四者上
風是爲四品風主持水在上如浮雲矣

大樓炭經卷第三

大觀十六年歲次癸卯八月丙寅日壬子時

「浄土」購読規定

一部 定価 百円

(送料十二円)

会費一力年金一、二〇〇円

(送料 不要)

浄土 十月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十八年九月二十五日 印刷
昭和四十八年十月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 関 二二男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鐵仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

絵伝『法然上人』

かねて若い世代にむけての伝道文書をとの声しきりでしたが、このたび開宗八百年記念出版として、勅修御伝にのつとつた新しい感覚の絵伝『法然上人』が発行となりました。

青少年はもとより、博い層にわたる檀信徒方への施本として、開八慶讃法要などの機にご利用頂きますれば幸甚です。

B5 変形版 (タテ20cm × ヨコ22cm) 24頁

定価	180 円	〒 80円
50冊以下	単価 180 円	送料実費
50冊以上	" 170 円	
100冊以上	" 160 円	} 送料無料
200冊以上	" 150 円	
500冊以上	" 140 円	
1000冊以上	" 135 円	

京都市東山区林下町
発行所 浄土宗宗務庁

待望の資料刊行さる

大正大学教授 玉山成元 校訂

『西福寺文書』

A5版 220頁 定価 3,500 円

この度、史料纂集〔古文書編〕として刊行された、北国の名利、越前敦賀市西福寺に現存する古文書約三百点が収録されている。浄土宗に現存する中世の史料としては最も貴重なものであり、浄土宗の研究はいうまでもなく、日本歴史を究明する上でも極めて価値の高いもの。古文書学・仏教史学に造詣の深い玉山成元教授によって厳密な校訂がされ、誰にでもわかるように解説されたユニークなもの。開宗八百年の記念にふさわしい良書として、お求め頂きますれば幸甚です。

東京都豊島区池袋2-1008
発行所 続群書類従完成会

TEL (03) 983-6846 番 振替東京 62607